

活けるキリスト夏期聖会(2) (箱根)

天極道

——マタイ伝6章9～13節——

(「活けるキリスト」誌130号 1976年12月号より転載)

1976年7月25日

小池辰雄

信頼のその日暮らし 平伏しの祈り 最も美しきもの 大交響曲 サタンの試惑 一極絶対道
劇的三界 ハレルヤ

●信頼のその日暮らし

「トン アルトン ヘーモン トン エピウーシヨン ドス ヘーミイン
セーメロン」

「日毎のわれらの糧^{かて}を今日もわれらに与えてください」(マタイ6・11)

これは食糧問題、経済問題です。一日一日を本当に生きれば、さきほどの今橋さんのお話しの通り、日毎に神様は助けてくださる。

本当に御意に従って生きている時に、神様はこれを飢えさせない。このことは、皆さんいろいろなことで御体験であると思います。今は、物価騰貴^{とうき}の現象のため、結局、賃銀要求をしてストライキなど年中行事のようにやっているから、いつまでたつても埒^{らち}があかない。ところが、さすがにドイツはちがいます、ドイツ人はもつと理性的に、そして、国家を中心に物を考える。無駄はしない。例えば電気なんか、これは国のためにならないといって電気を消します。自分本位な考え方とはおもむきがちがいます。そういう気持がドイツ人の血の中に流れている。

日本人は、本当の意味で国を愛することがおろすになつている。日本の国旗だつてすばらしいでしょ。こんなすばらしい国旗はないじゃないですか。太陽なくして地球は、世界はない。太陽的な日本になれば、日本は世界平和のもとになるはずですよ。

太陽は、私たちにとつて義のキリスト、愛のキリストの象徴です。ドイツの詩人ゲーテは、本当に太陽を愛した人です。彼は、あのような偉大な文学を展開していききましたが、彼は、自分を太陽の子として自覚していた。死ぬ時も、

「メーア・リヒト！」(もつと光を！)
と言った。

そういうわけで、キリストに依り頼む時は、決して困らない。藤井先生は、

「このキリストにあつて生きていて、飢え死にするならしたつていいじゃないか」



と言われた。藤井先生も、本当にそのような生き方をされた方でした。先生が死んだ時は、財布の中は空っぽだよな。借金もなければ、貯金もない。先生の全集が出たら、子供さんたちは、それで助かった。まあそんなわけで、信頼のその日暮らしです。

「信頼、信頼」

と藤井先生は言っておられました。

●平伏しの祈り

「カイ アフェス ヘーミン タ オフェイレーマタ ヘーモーン、ホース
カイ ヘーメイス アフェーカメン トイス オフレタイス ヘーモーン」
「われらに負債ある者をわれらの赦したる如く、われらをも赦してください」
(マタイ6・12)

ここが楢岡の二中心といった、そのもう一つのところです。きつきの「聖意体现」とこの「罪の赦し」。これはルカ伝の、

「⁴我らの負債ある凡ての者を我ら免せば、我らの罪をも免し給え。我らを

嘗試にあわせ給うな」(ルカ11・4)

と、ちよつとちがつて、マタイ伝の方は、

「負債ある者を、われらの赦したる如く、われらをも赦してください」

と。「負債」とは、もともと経済的な言葉だったんでしようけれども、キリストのたとえ話によく出てきますね。すなわち、神さまに祈る時に、

「相手の罪愆を、負い目というものを赦さないで祈ったって、それはだめだ」

と。私たちは、手放しではなかなか人を赦せない。

「あの野郎!」

とか言ってるね。そして、すぐ第三者の批評というのは、お互いさま本来すべきことではない。善く言うのはいいよ。悪く言うのは、だんだん尾ひれがついちゃって、とんでもない誤解の種になる。私たちは、キリストの十字架で罪の贖いをされ、徹底的に赦された人間です。キリストに無条件に赦されていて、人を赦せないわけはない。キリストの赦しをもって赦すけれども相手が逆らっていたら、それをただ、

「よしよし」

なんていうわけにはいかない。これは本当の親切ではないから。相手が逆らっている時は、放つたらかしておいていいですよ。ただ、その時は、本当に執成の祈りが必要だ。けれども相手が、

「悪かった!」

と言ったら、これは無条件で赦す。

イエス様は、どんな人でも砕けてかかってきたならば、そういう魂を全部、全的に受けとつ



ちやう。ところが、自分を何者かとしているのでは、キリストは受けとらない。だから、砕け、ひれ伏しというのが大事です。ところが、砕け、ひれ伏しも、人間的な砕け、ひれ伏しは、まだ大したことはない。

「砕け悔いし魂を軽しめ給わない」

という詩篇51篇の事態は結構なことなんです。けれども、本当の砕け、平伏しは、キリスト自身がなされた。キリストの砕けを、キリストのひれ伏しを頂くことが、本当の砕けなんです。

「まだ私は砕けていません」

だとか、

「私はまだ傲慢です」

なんて言うことは、五十歩、百歩ですから。キリストの神様に対するひれ伏しと、神様の前に本当に砕けておられたあの心、あのすがた、それを十字架を通して頂く。砕けの極致は十字架です！ これは、

「お前の砕け切れざる姿、我執を、全部私が引き受けた」

という十字架の贖いです。小羊となり、自分自身が大祭司となられたのがキリストの十字架ですよ。そのことを詳しく書いてあるのが、ヘブル書第9章、第10章です。あのヘブル書というのは、すばらしいです。ことにユダヤ人があれを本当に読んで悔い改めなかったら、仕様がななんだ、本当は。パウロがどんなに天界で呻いているか！

●最も美しきもの

ところで、ある挿話みたいのをお話いたします。しかし、聞いたままではないですよ、私の創作がその中に入っているから。

「ある夜のこと、ある旅人が夢を見た。天使が現れて、

『あなたは明日一日のうちで、最も美わしいことを私に明日の夜に話してください』

と。その旅人は、

『ようついでいます』

と言って翌日目をさめると旅に出ました。旭日がすーっと昇ってきた。

『ああ、美しいなあ！ これが一番かなあ』

と思った。朝日を受けて草の葉の朝露が、きらきらきらと輝いている。

『これはダイヤモンドもかなわない。朝露の輝き、七色にきらきらきら光る。

ああ、何と美しいなあ！ これが今日の一番美しいことになるかなあ』

と思つて、また歩いて行つた。お花畑に出ました。

『いやあ、奇麗な野原だなあ、何ときれいな高原の草花か！』

もうそこを動くのがいやになつちやつた。高原に腰をおろして草花の美を満喫しました。



さてまた、更に歩き続けました。川べりに来ると、美しい女の人が裸で湯あみしていた。女性の美というものに今度はうたれちゃった。

『これは美しいものだ！ 神様の創造の傑作だなあ』

と。またこれで、ちよつと心が動揺しちゃった。そしてまた行きますと、今度は畑に出た。畑ではたくましい男が一生懸命働いている。

『これはすばらしい姿だ！ この男性美の方が上かな？』

なんてなわけです。夕方になりましたら、子供たちが、「夕焼け小焼けで陽が暮れて」という歌をうたいながら、家へ帰ってくる。何とも可愛らしくて、

『ああ、これは他のものと替えることはできない美しい天国的な光景だな！』

と。これにまたうたれた。まあどれもこれも美しくて、どれが一番だか決めかねた次第でした。すばらしい一日でした。でも更に進んで行きましたら、陽は西山にうすづきまして、薄暗い。路ばたに泣いている男がある。そして、

『どうぞ、私の罪を赦してください。もうどうにもなりません』

といって本当に男泣きに泣いている人を見て、一人の人間がはらわたの底から罪のゆるしを求めているその姿に感動しました。砕けた心の世界にうたれました。

『ああ、結局、私たち人間にとつて一番感動的な姿はこれだ！ 他の美しさも、美

しいのだが。しかし、この砕けた心の姿に自分はうたれた』

と。しかしながら、そのうたれたと同時に、彼は、その男が気の毒になって、

『どうしたんですか』

と言って、疲れ切った男を背負うようにして、旅舎に連れて行って、寝かせてやった。その晩、天使がまた現れて、

『あなたは、一番美しいものは何でしたか？』

と尋ねたので、

『かくかくしかじかであったが、最後のこの男の罪の赦しを求めている姿に打たれて、私はやっぱりこれが一番美しいと思った』

と答えた。

『そうですか、それでどうしましたか？』

というので、この旅人は、

『その先はいいですよ』

といって黙ってしまいました。そうしたら天使が言いました、

『一番美しかったのは、実はあなた自身だよ。この罪に泣いていた、疲れ果てた人を背負って、旅舎に連れて行ってやったでしょ。あのあなたの愛の行為、これが一番美しいんです』

と。」



こういう話です。

「赦したる如く、ゆるし給え」

という祈りの先きを、主さまはおっしゃらなかったけれども、この「よきサマリヤ人」の事態——赦すばかりでなくて、それを担い、愛する事態——これは聖霊の世界でできます。だから、「主の祈り」の奥にもう一つ隠されている。キリストは、最後の一番大事なものは、おっしゃらなかった。この真理は隠されている。表わされた真理の奥にある真理というものがあ。ゲエテは言いました、

「言いたいことがあつたら、一番言いたいことは、言わないで。それは、聞いている人が、自分で発見することになるように」

と。とうとう、天使は、自分でよいことをしても、それを自覚しなかつたその旅人をほめました。それはちょうど、イエス・キリストの

「お前はわたしがかわいていた時に水を飲ませてくれたね」

「主よ、いつ飲ませましたか？」

「いや、いと小さき者に水を飲ませたのは、わたしに飲ませただけ。そういう

のが天国人である」

とのマタイ伝25章31～46節の、山羊と羊とに分けたあの事態。すなわち、もはや善をも愛をも意識しないような愛の世界。天然、靈然の世界！ 天的自然、靈的自然、靈然の世界。この靈然の事態に入った時に、これが、本当に天国人の姿だね。

「主の祈り」は、ただキリストは一つの祈りのサンプルを言われただけで、この一つのサンプルを通して無限に展開していきます。シュバイツァーが小さい時に、

「この主の祈りの中には、可愛想な動物のために祈っていませんね」

と言って、シュバイツァーは、

「可愛想ないろんな動物を、どうぞ神様、あわれんでやってください」

という祈りをつけ加えたそう。彼の自叙伝の中に書いてあります。

●大交響曲

福音は、ヨハネ伝の最後の一句（ヨハネ21・25）のように、もうキリストのなされたこと、おっしゃったことは、盛り切れないんだ。

「そのような句は聖書の中にあるの、ないの」

なんて、くだらないことを言わないようになります。聖書は無限無量の書ですから。その奥からいろんなものが響いてくる。それを私たちは、自在に読み取っていく。聖書のつかみ方は、昨日と今日とでは自在にちがってゆく。それが本当の展開というもの。カトリックでは、

「こう解釈しなければいけない」



だとか、プロテスタントでも、聖書釈義とかいつてやかましい。もっと自在な無限な弾力性のあるものです。

「霊は生かし、儀文は殺す」

とパウロが言った通りです。もはや解釈ではなく、聖書を生きる角度にならなければ、聖書を読んでいるなんていつてもつまらないことです。本当に聖書の現実を生きるようになると、パウロと共に、

「万物をわれらに賜わざらんや」(ロマ8・32)

という境地に、宇宙をみたまの翼に乗って天翔けるような心境になれます。宇宙ロケットも何も要らん。私たちは本当に万物と兄弟、友だちです。まあ、真のクリスチャンという存在は、何とも説明のできない人間であります。

「キリストをもつ者は一切の秘訣を得、勝ち得て余りあり」

と。パウロ書簡の特にエペソ、ピリピ、コロサイの、牢屋につながれながら、あの盛んなる魂はどうですか！ 何と言ったって、このパウロという人は、もう何とも言えないね！ イエス・キリストの本当の証者ですね。

しかし、私たち人間の大小はどうでもいい。神様はいろいろに造っておられるんだから。みんな桜の花だったらどうするか。いろんな花があって百花僚乱。いろんな木があって森然というわけ。殷然たる大交響楽です。一つの弦の響きがなくてもいけない。そのような具合に皆さんは、一人びとりのつぴきならない響き、存在自体が神様の響きとしてある。また、一人びとりが七色の一つ一つ。否、無限の色合いの多様性の一つ一つなんです。

人まねは一つもいらん。神様はひとりびとりを一品に造られた。これを人格というのです。あなたがたひとりびとりは天下一品なんです。ひとをうらやむことは、一つもいらん。皆さんの顔はみんな違うじゃないですか、指紋は何億あってもみんなちがうというんだから不思議、絶妙な創造のわざですね。神様は最大の芸術家、生命的芸術家です。

神の現象体イエス・キリストは正に無限無量者です。信仰箇条の中に固めてみたり、神学の中に閉じこめてみたり、そんなものじゃないですから。パウロさんが、

「お前は、聖書をそんなに読んでくれたか」

と言い、ヨハネさんが今橋先生に言ってるでしょ、

「私は、そんなつもりで書いたのではないが、よく読んだね」

なんてなわけですよ。聖霊の世界は御飯よりはるかにおいしい御飯であります。

●サタンの試惑

「カイ・メー エイセネングケース ヘーマス エイス ペイラスモン」

「またわれらを試惑に引き入れ給うなかれ」(マタイ6・13前半)

こういう詩があるね、



「風吹不動 天辺月 (風は吹けども動ぜず 天辺の月)
雪圧難摧 礪底松 (雪は圧せども摧け難し 礪底の松)

風がいくら吹いても、天辺の月は動かない。雪は圧するけれども、谷底の松はそれで屈しない。そうなるにはどうしたらいいか。

「試み」という原語は「ペイラスモス」という字です。試みには「試鍊」と「誘惑」と二通りある。「誘惑」はサタンの方からやってくる。「試鍊」は神様の方からやってくる。

「試鍊は愛する者を鍛える」

とありますから、神様からくる「ペイラスモス」(試鍊)の方はいくら来てもいい。ところが、「引き入れ給うなかれ」

という方は誘惑の方で、サタンのいぎないです。これには、うっかり自分で対抗しようとするとは負けますよ。キリストが荒野の試みの、あの一騎打ちでもって、お勝ちになったのは、ご自分の霊力でお勝ちになったのではない。どこまでも、

「神様!」

とキリストは祈っていたんです。キリストは、

「神の御意が一切であつて、御利益信仰ではない」

と言われ、

「お前はここから、落つこちてみる、天使が支えるぞ!」

とサタンが詩篇のことばを使って誘惑してくれば、キリストは、

「神様を試みたらいかん。御意に従うだけの話だ。私ここから飛び降りることが

御意ならば、神様は必ずいいようになさる」

といった心境です。どこまでも神中心、神一切でキリストはサタンに勝ち給うた。

御霊の世界も、私したらサタンになりますよ。

「私はだいたい霊的に強くなった、だいたい自信ができた」

なんて思ったらサタンに切り変わります。

あの旧約のサウロ王は、はじめサムエルに按手されて神霊が臨んで以来、手当たり次第にやって大丈夫だった。そのうちに、ダビデに対して妬みを持ちはじめ、忠臣ダビデを討とうと謀りだした。それは既にサウロの霊がサタンに切り変わった証拠です。神の霊の人をサタンはねらつて挑んでくるわけです。

だから、キリストの弟子たちより先きに、マルコ伝の5章にあるように、穢れた霊に憑かれた者がイエスを指して、

「いと高き神の子イエスよ!」(マルコ5:7)

と叫んだ。他の人には分らない。ところが霊的な奴には、分るのです。霊的になってくると、霊の作用が激しくなってくる。だが、その時に霊の事態を私しては断じてならない。



●一極絶対道

これはちよつと余談になるけれど、私の集会に以前、呪われている人があった。呪いの霊がかかってきた。そして、集会の終わり頃に、

「痛い、痛い、痛い!」

と言いだすので、何事かと思った。

「先生、今、もものところを刺されています」

と言う。呪いで刺されている。それで私が、キリストの聖名を呼んでいたら、だんだん抜けてゆく。そしてとうとう、

「先生、抜けちゃいました」

というわけです。あつちのやつがこんどはぶつ倒れたらしいね。

「あの人を守っている霊は強いから」

といて、それからやめた。いろいろ聞いてみると、家にいろんなことがあつたらしい。大体、家を建てた時に蛇が梁はりにからまった。それを殺した。蛇のたたりが来ているわけ。生き物を殺したあとは、やつぱり、念仏なり、キリストの祈りをささげておかないと、だめですよ。霊の世界には霊法がありますからね。その蛇の霊のためにもやつぱり供養をしなければいけない。

しかし、イエス・キリストは最高の霊ですから、あなたがたは、キリストに本当に魂を籠こめて祈れば、一つもこわいことはない。必ず勝ちます。人のためには執り成しが大切です。

「御言葉の一言、彼をば倒す」

とルッターの宗教改革の讚美歌にあるのは、「クロイツ!」(十字架)、「クリストス!」(キリスト)とか、そう叫ぶとサタンは逃げちゃう。「南無阿弥陀仏」、「南無妙法蓮華経」と同じことです。いざないにあつたらば、心の中でキリストを唱えること。自分の信仰で勝とうとか、そんなことではなしに、即、

「主さま!」

と、その一言。そしてキリストと一つになる。即ち、

「南無キリスト」

の現実になつちゃうんです。向う側ではだめですよ、「主さま!」という時に。さつきから申し上げているように、祈り入らなくちゃ。自分を投げ入れなくちゃいけない。そうしたらば、ウワツと力が臨む。それで勝利がきます。力強い真理は簡単明瞭です。

皆さん、昨日の感話を伺った中にいろいろ悩みがあつたようですが、要りませんよ、何にも。どうなつたっていい。

「どうにでもなりやがれ!」

と。それで、

「主さま!」



とやっていけば、知らない間に道が開けてくる。行き詰まったと思った時に豁然^{かつぜん}として開かれてくる。それを是非体験してください。主の中にあつて憂えることは一つもない。

ああ何と、こう見ていても、皆さんの目の色、顔の色が変わってくるのか。女の方はみたまがのぞむとみんな美人になる。心の美しい、魂の美しいことが本当の美ですから。

こんな世の中だったら、いろんな誘惑に会うよ。いろんなことに会うけれども、しかし、この御霊の世界に入ると、いくら誘惑の風が吹いても、誘惑の圧力がきましても、びくともしない。さっきの最初の詩句のようになる。自分は弱い、

「われ弱き時に強し」

とパウロが言った。そのようなわけであります。弱さに徹すればいい。弱さに徹すれば本当の強さになる。これが一極絶対の世界なんです。天の一極に絶対帰依する道であります。これを天一極道、略して一極道^{いつきよくどう}、又は天極道^{てんごくどう}と言いましよう。

● 劇的三界

「アラ ルーサイ ヘーマス アポ トゥー ポネール」

「われらを悪しき者より救い出し給え」(マタイ6・13後半)

「悪しき者」というのは、「悪しき事態」でもあるし、「悪しき者」サタンでもある。「アポトゥー ポネール」はやはり「サタンから」の意の方がより本質的なわけです。

主の祈りは、最初、「父」であり、次に「聖国」であり、「聖名」でありました。ここが天国界です。それから、「聖意」の地上実現。次に「今日の糧」の一日一生、これも地上界。次は「赦罪」「試惑」の地獄界です。即ち「主の祈り」は、天上界、地上界、地獄界の三界を高く低く且つ深く祈っているわけです。

現実界は、聖意体现。それから、今日一日を一生として生きる。

「今日、このように生命を受けたら、もう次の瞬間には死んでもいい」と、今橋先生は言いました。

「死んでも死なない体験をしたから、死んでもいい」

と言える。キリストのところ本当に生かされているから。そういうのが、一日一生ということ。これが現実界です。

それから、最後は地獄界。

「罪をどうぞ赦してください」

と。これをしなければ地獄に入っちゃう。

「神様、どうぞ誘惑にかけないでください。そうしなければ、わたしは地獄に入る

から」

と。だから、「天界」と「現実界」と「地獄界」が、この主の祈りの中に、ちゃんと自然に織り込まれている。



詩篇23篇がそうですよ。

「緑の牧場、憩いこいの水際みずぎわ」(2節)

これは天国界。

「聖名のゆえに正しき道に導き給う」(3節)

は現実界。

「死の陰の谷を歩むとも」(4節)

これは地獄界。これを全部突き抜けて勝利していく、というのが詩篇23篇。たった6節だけれどね。

「わが杯」(5節)

というのは、

「われという盃を、御霊をもって溢れさせてください」

との意。

「いつまでも宮に住まん」(6節)

ではないですよ、

「わたしは、いつまでも宮とならん」

です。新約の光で旧約を照破読破してゆく。まあ、そんなことを言うとは、

「小池なんて、でたらめだ」

というかも知れない。ところが決してでたらめではありません。この聖書の御霊は、創造してやまないところの霊だから！ 驚くべき劇的有機体的な展開がなされます。

●ハレルヤ

「聖国と力と栄光とは、永遠に汝のものである。アアメン」

本当にそうです。とこしえに神の統治し給うところ、「聖国」「バシレイア」は「支配」を意味することは御承知の通りです。愛が支配しているところですよ。愛が一切を支配している。だから、「力」をもって救い上げていく。「聖国」はそういうところですから。

そうして、もう全生活が、どんなところを通って行っても、讚美、ハレルヤ！です。讚美が私たちの生涯の姿である。ベートーベンの「第九シンフォニー」や、ヘンデルの「メシヤス」を地でゆくのですね、クリスチャンの本当の讚美とは！

そういうわけですから、何とキリスト者とは盛んなるものである哉！ 神・キリストの盛んなる証者！ ああ！ もう何とも言えないです。ハレルヤ！

〔附記〕講述者はかつて『聖意体现』と題して「主の祈り」のかなり詳しい解説を書きました。今、今は絶版になっていたので、やがて「小池辰雄著作集」の中に3回にわたる本稿と共に編入する所存です。ここに附言させていただきます(小池)

